

小川政弘作 「なんとなくクリスチャン」

(効果音) (校庭のガヤ)

女生徒1 わあ、飯田君、新車じゃない！ スゴいわねえ。

女生徒2 ほんと。なんてったっけ？ あのコマースシャルの面白いの。そう、ホンダのシテイでしょう！

飯田武彦 まあね。

男生徒1(会田) だけど、おめえんち、スゲえなあ。おやじさんは外車乗ってんだらう？ この前はピカピカのナナハン、今度はお前専用の車かよう。

武彦 別にムリしたわけじゃないんだ。お父さんの車じゃ学校乗っていけないし、僕向きの車があったらいいなあ」って言ったら、この間の誕生日に買ってくれたんだ。「その代わりに、これから半年、受験勉強しっかりやれ」って。

男生徒2(木村) へえー。おれなんか、車買ってくれるんだったら、一日 10 時間でも勉強して、親の望みの大学入ってやるけどな。

女生徒1 木村君じゃムリじゃない？

一同 (笑い)

ナレーション 飯田武彦は、青春高校の3年生。開業医をしている父と母の一人息子として、小さいころから何不自由なく育てられてきました。両親はクリスチャンで、彼も高校1年の時、親や牧師に勧められるままバプテスマ(洗礼)を受けたのですが、小さいころから教え込まれた、“キリストは罪びとの身代わりに十字架で死なれた”ということ、素直に信じてはいるものの、彼の心は、“日々、生きているイエス様と共に歩む”というクリスチャンの生き方とは、遠く隔たっているようでした。

母 (階下から)武彦さん、そろそろ行くわよ。

武彦 今行く。(モノローグ)礼拝出て、牧師さんのお説教聴いて、あの話がまた長いんだよな。ヘタすると1時間ももんな。そして午後から高校生会。なんか全然ノッてこないんだよな。“愛”だとか“赦^{ゆる}し”だとか… “耳にタコ”だよ。

父 武彦、何グズグズしてるんだ？ 遅れるぞ。

武彦 はい！

母 武彦さん、そのシャツ、少しハデじゃないの？ この夏、海に行く時に買ってあげたものでしょ？ 神様を礼拝しに行くのよ。

武彦 お母さん、古いよ。これが一番ナウいやつなんだから。それに教会の同じ高校生の藤村みたいなダサいのよりマシだろ？

父 武彦、なんてこと言うんだ。藤村君はお宅が裕福じゃない。お前みたいな暮らしができないのは当たり前だろう？ それともお前は人を外見で判断するの

か？

武彦 別に、そんな意味じゃないけど…。

ナレーション 藤村和夫は、中学時代から武彦とともに教会に通っているクリスチャンでした。小学校6年の時、病気で父を亡くし、その後、病気がちの母と妹を、アルバイトをしながら面倒見ているのです。そのため生活は貧しく、着ているものも、古いものが多いのです。性格も、武彦とは対照的に、穏やかで静かでしたが、その心は神と人への愛にいつも燃えていました。

(効果音) (教会のガヤ)

教会員 (口々に)おはようございます。

藤村和夫 やあ飯田、おはよう。

高瀬みゆき おはよう、飯田君！

武彦 あれ、みゆきちゃん、今日は映画に行くんじゃないの、会田たちと？

みゆき えー、わたしが？ 冗談じゃないわよ。日曜日は教会で主の日を守るの、知ってるでしょ？

武彦 そりゃそうだけど、あいつら、しつこく誘ってたから。

みゆき 「日曜日は絶対ダメ。イエス様とデートよ」って言ったら、キョトンとしてたわ(笑い)。それより飯田君こそ、揺れ動いたんじゃない？

ナレーション 高瀬みゆきは1年下の高校2年生。小学生のころから、武彦と共に教会学校に通い、学校も同じところから、武彦のことはまるで兄弟のようによく知っていました。特に、彼の外見がだんだんハデになっていくのに引き換え、その心が少しずつ信仰から離れていくのを、彼女は人知れず心を痛めて祈っていたのです。礼拝が終わって午後の高校生会で――。

金田先生 「人、その友のために命を捨てる、これより大いなる愛はない」と書いてあるよね？ 「友のために命を捨てる。」これは必ずしも文字通りでなくてもね、現実にはなかなか難しいと思うんだ。どうだい、藤村君？

和夫 はい、この間、先生、三浦綾子さんの「塩狩峠」、高瀬さんから借りて読んだんです。主人公の永野さんが、婚約者の病気が治るのを何年も待ち続けて、やっと晴れの結婚式という日に、乗っていた汽車が機関車を離れて、下り坂を暴走する。このままじゃ何十人の命が危ない、という時に、永野さんは線路に身を投げ出して命を捨てることによって、みんなの命を救うんです。

みゆき わたしも読み終わった時、布団の中で1時間ぐらい、ワアワア泣いちゃいました。

金田先生 あれは明治時代にあった本当の話がモデルなんだよ。どうだろう、僕たちにもできるかな。飯田君、どうだ？

武彦 ええ、僕ですか？ どうかなあ。そんなこと考えたことないから。でもその場になったらできんじゃないかな。やっぱ、クリスチャンだし。

和夫 僕は多分ムリです。“今、自分が死んじゃったら、あとに残った母や妹が…”なんて思うと、とても。それに、死ぬの怖いし。でも、もしその時、イエス様が「そうしなさい」って言われたら、自分の力じゃできないけど、思い切ってそうするんじゃないかなあ。

武彦(モノローグ) またあんなカッコいいこと言いやがって。

ナレーション 武彦は、いまいましそうにつぶやきながら、心の奥底では、いつもありのままの自分を見詰めて、しかも現実的にイエス・キリストと結び付いた物の巻が得方をする藤村をうらやましく思っていたのでした。

金田先生 うん、それが僕たちにできる精一杯の正直な答えかもしれないな。先生がみんなに考えてもらいたいのはね、本当の信仰というのは、キリストが歩まれた道を一步一步歩いていくということなんだ。主の十字架への道は、決してカッコいいもんじゃなかった。血と汗と泥にまみれた、ダサイことこの上もないご生涯だった。栄光の神のみ子が、わたしたちの罪を赦すために、進んで命をお捨てになった。飯田君や、藤村君や、高瀬さんのために——。この十字架が、僕たちの行き方の、日常のあらゆる行動の原点でなけりゃいけないと思うんだ。信仰はアクセサリーじゃないんだ。

武彦(モノローグ) “信仰は、アクセサリーじゃない”?(多重エコー)

ナレーション 武彦はドキッと自分の胸元に目をやりました。そこには、金の鎖につながれた十字架のペンダントが光っていたのです。彼はクラスでも、クリスチャンお印として、カッコよさのシンボルとして、この十字架を自慢していたのでした。その日の帰り道——。

みゆき 飯田君、今日の話、どうだった？

武彦 どうって、別に。

みゆき ウソ。金田先生の最後のお話の時、飯田君、ドギマギしてたわ。あなたの十字架のペンダント、知ってるのよ、わたしも。ねえ飯田君、このごろのあなた、少しどうかしてるわよ。

武彦 なんだよ。朝からたっぷりお説教聞かされて、君にまで、もうたくさんだよ！

みゆき ううん。今までわたし、なんにも言わなかった。ただ陰であなたのこと祈ってた。でも今日は聞いて。武彦さん、このごろだんだん変わってきたわ。自分の身に着けてるもの、よく見て。腕時計、シャツ、屈した、靴、それにそのペンダント。みんな高価な一流品づくめ。高校生らしくないわよ。それに、そのヘンなヘアスタイル。香料のにおい、プンプンさせて。

武彦 何着ようと勝手だろ。君にそんなこと言われる筋合いないぜ。

みゆき そう、勝手よ。あなたがその格好で、新しい車を乗り回しても、そのペンダント、キラキラさせてディスコで踊っても、それはあなたの勝手。でも、そうすればするほど、武彦さん、薄っぺらに見えてくる。わたしが一番我慢できないのはね、

そうやって自分をカッコよく見せて、ほかの人を、そう、同じイエス様を信じてる藤村君までバカにしましたことなの。武彦さん、本当にそれで心の中、平安なの？ 満足してるの？

武彦 やめろよ、もう。君に関係ないよ。僕のやりたいようにやるさ。

みゆき (泣き声で)武彦さんのバカ！ 藤村君や金田先生が、心を痛めて毎日祈っているのが分からないの？ あなたの信仰は、先生の言ったとおり、ただの“飾り物”ね。上っ面だけの、“なんとなくクリスチャン”よ！

ナレーション 武彦は、目に涙をいっぱいためて叫ぶみゆきの声を背に、逃げるように車に乗ると、思いっきりアクセルを踏みました。

(効果音) (アクセル、車の疾走音)

武彦 チキショー！ カッコよくするのが何が悪いんだ！ おれはおれだ！

(効果音) (車が「キキキー！」とスリップする音)

武彦 あ~~~~！

(間)

武彦 (かすかな声)こ、ここはどこだ？ うっ、痛い！…僕は、…車に乗って… あそこのカーブで…。すると、ここは…？

母 武彦さん、武彦さん！（そばの夫に）あなた、気がついたようよ。(教会学校の金田先生に)先生、武彦、気がついたようですわ。

父 武彦！

金田先生 ああ、飯田君、よかったなあ。

武彦 せ、先生。

みゆき 飯田君。危ないところだったのよ。出血がひどくって…。

武彦 ああ、みゆきちゃん。僕は多分神様のバチが当たったんだね。先生や、君や藤村にもさんざ心配させて。藤村のやつ、これも当然と思ってるだろうな。

みゆき 何言ってるの。藤村君はね、真っ先に駆けつけて、病院の血液では足りないって聞くと、お医者さんに無理に頼んで、もうこれ以上は危険だというギリギリのところまで血を採ってあなたに輸血したの。その藤村君の血で、あなたは一命を取り留めたのよ！ 今、隣の部屋で休んでるわ。

武彦 …藤村！

ナレーション 武彦は、今、自分の体内を流れている藤村の血が、熱いほとばしりとなって体中を包んでいくのを感じました。あふれ出る涙をぬぐおうともせず、武彦は、「人、その友のために命を捨てる。これより大いなる愛はなし」のみ言葉を、心にかみ締めていたのです。

聖書の言葉 キリストは、私たちのために、ご自分の命をお捨てになりました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから私たちは、兄弟のために、命を捨てるべきです。世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、哀れみの心を

閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。子供たちよ。私たちは、言葉や口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。

<完>